第14期　葛飾区社会教育委員の会議（第７回）会議録

● 開催日時　令和６年２月15日（木）　午後２時00分～４時00分
● 会　　場　立石地区センター
● 出席者

社会教育委員　（５人）

髙井　正　　萩原　建次郎　　緒方　美穂子　　佐藤　菊宏
澤村　英仁

事務局職員　（３人）

生涯学習課学び支援係長　佐藤　吉裕
生涯学習課学び支援係主査（社会教育主事）　与儀　睦美
生涯学習課学び支援係　矢作　孝寛

出席者　計８人

次第

１　議事

（１）「荒川コミュニティカレッジ」についての振り返り

（２）「すぎなみ大人塾」の事前学習

（３）今後の会議の進行について

（４）その他

配布資料

○第６回会議会議録案

○「荒川コミュニティカレッジ」関係追加資料[資料１]

○「すぎなみ大人塾」関係資料[資料２]

○「すぎなみ大人塾2022記録集」

○「大人の寺子屋おもしろＭＡＰ」

○第１４期葛飾区社会教育委員の会議スケジュール（案）［資料３］

○かつしかのきょういく　第153号

○関連事業チラシ（かつしか区民大学「健美操で目指せ免疫力」・「麻雀入門」、「サークル活動体験会（柴又・水元）」

―開会―

○事務局　今、インフルエンザなどの感染症が流行している中ですが、皆様お集まりくださいましてありがとうございます。ただいまから第７回社会教育委員の会議を始めます。

本日、欠席のご連絡をいただいている委員は、齋藤委員と山村委員と風澤委員です。また、生涯学習課長は出張中で欠席します。

本日は傍聴者が１名いらっしゃいます。では、傍聴の方にお入りください。

（傍聴者入室）

それでは、資料等の説明をいたします。次第が一番上にあるかと思います。

次に、第６回の会議録案です。こちらをお持ち帰りいただいて、ご確認の上、修正箇所がございましたら、２月 29 日までに事務局までメールでご連絡ください。なお、こちらはまだ「案」ですので、取扱いにはご注意をお願いいたします。修正を反映させましたら、確定版を葛飾区ホームページに掲載いたします。

資料１は、荒川コミュニティカレッジの関係の資料です。前回、荒川のお２人においでいただいてお話を伺いましたが、早瀬さんから追加資料ということで「第 12 期あらかわ健康・福祉コースカリキュラム」を皆さんに配付します。こちらは早瀬さんが参加したときのプログラムということで、職員の中泉さんから、内容が現在と大分変わっているということで、例えば入学式、修了式などは実施していないとか、実施方法やテーマ設定なども現行とは違っているということがあって、荒川区としては、社会教育委員の皆様だけの配付にとどめてほしいということですので、よろしくお願いします。

そのほか、今日は杉並区について事前学習をするということですので、「すぎなみ大人塾」の関係資料、資料２ということで、「広報すぎなみ」、あとの２枚は議長から提供していただいています。杉並区から提供された冊子、「すぎなみ大人塾 2022 記録集」、それから「大人の寺子屋おもしろＭＡＰ」です。

そのほか、資料３はスケジュールの案。そして、関連の資料としまして、「かつしかのきょういく」の 153 号です。こちらの表紙には、緒方さんが出席してくださった「かつしか教育プランを策定しました」という記事が掲載されています。

それから、関連の事業のチラシとしまして、かつしか区民大学のいくつかの事業と、「サークル活動体験会」ということで、習字や居合道などの事業のご案内です。事業はこのほかにもいろいろ開催していますが、主立ったもののみを紹介させていただきます。

資料は以上です。

それでは、この後は髙井議長に進行をお願いします。

１　議事

（１）「荒川コミュニティカレッジ」についての振り返り

○議長　皆さん、こんにちは。今日は欠席の方も多いですが、しっかりやっていきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

次第により、まずは「荒川コミュニティカレッジ」の振り返りを始めていきたいと思います。その後、次回、杉並の方に来ていただきますので事前学習、最後は今後についてということで、３点が議事としてあります。

「荒川コミュニティカレッジ」につきましては、私どもで事前に学習をしたうえで、生涯学習フェスティバルに行って、前回、担当の職員と活動している方に来ていただいて、ほぼ３回かけて学んできましたが、今日は、前回お話をしていただいた振り返りということをまずやりたいと思います。何が大事だったのか、これからの葛飾区の「学びの循環」というのを念頭に置きながら、何を参考にし、どのようなことを考えていったらいいんだろうかというようなことで、今日の話を進めていければと思います。葛飾区の取組に生かしていきたいところをしっかり探していければと思います。

荒川のお二人には 12 月に来ていただいたので、時間もたっております。その後、お正月、すごい始まりのしかたをした今年なわけです。個人的なことで恐縮ですが、12 月の中旬に能登に遊びに行ったんです。妻と２泊３日で。行ってきたところが全部被災したわけなのです。最終日に行った見附島というのは、軍艦島とも言われて、そこも崩れてしまいましたし、千枚田、棚田があるんですね、それも崩れてしまったし、もちろん朝市もそうですし。そうした中でお正月を迎え、私としては、お正月になってああなって、非常に僕としては、そういう遊びに行っていたということに対しても何かすごく暗い気持ちになったなというところではあります。しだいに復興の動きも出てきているので、きっといろいろな学びというのも、被災地の中では生かされているということもあるかと思いますので、応援の気持ちを持っていければなと思います。

ちなみに、東日本大震災の時、地域が協働活動をしっかりやっていたり、コミュニティスクールや地域の方が主体的に動いていたところの学校の避難所運営は、とてもうまくいったということが調査でも明らかになっています。福島のビックパレットという施設が避難所になった時に、その運営の中心を担ったのが県の社会教育主事の方でした。日頃の地域での学習活動が避難所に生きてくるという実践もたくさんありますので、きっと能登の中でもそういったことが行われているんではないかなと思いました。

ただ、全国の支援がないと成り立たないと思うので、何かできる支援を考えていけれ

ばと思っています。

では、本題に入りたいと思います。お手元にある資料、会議録を見ながら、どんな話を聞いたのかということを少し確認するために、説明をさせていただければと思います。

中泉さんの話で、私が大事だと思ったことは、この「コミュニティカレッジ」という事業が、荒川区の生涯学習の計画に基づいて、その理念を生かしていくためにきちんと位置づけられた事業だということです。大本となる基本構想の将来像、「幸福実感都市あらかわ」を基にしながら、荒川区の社会教育・生涯学習計画に位置づけられている。具体的には、第三次生涯学習推進計画、その基本理念の実現のためにこの事業があるんだと、位置づけが明確だということがとても大事なことだと思いました。

その第三次計画の基本理念というのは、「学びによる生涯活躍のまちあらかわ」ということで、それの実現のために「学ぶ」、「つなぐ」、「活かす」、「ひろげる」という４つの視点があるわけです。全ての取組にこの４つの視点が貫かれているというのが大変大事な位置づけで、特徴だというふうに思いました。大きな計画にしっかり基づいているということは、方向性を誤ってしまうことはきっとないのだろうなということを考えました。

例えば葛飾区では今回、大きな教育振興計画ができるわけですが、計画を作っておしまいになってしまう場合もあります。これは、政策なり施策を担う立場の職員の方にきちんとインプットされていないと、作って終わりになってしまいますので、荒川区のコミュニティカレッジは、このつくられた計画、大事な視点というのが全てにわたって貫かれていることがすばらしい特徴だということを、すごく改めてこの議事録を読んで感じたところです。

その後、「学ぶ」、「つなぐ」、「活かす」、「ひろげる」の具体的な中身を丁寧にご説明していただきましたので、お題目ではなく、この書かれている４つの視点がこんな形で生かされているのだということを感じることができました。もう一つの大きな特徴としては長期的な事業だということです。

「コミュニティカレッジ」は当初は２年間でしたが、今、１年とはいえ 20 何回という回数学んでいる。今日、早瀬さんがお出しくださったプログラムがあるわけですが、これは早瀬さんの今の「グループオレンジ」の活動に直接つながりある学びや活動だったからということでお出しいただいたというものです。毎年テーマや中身が変わっていくということは大前提ですが、区内にある都立大学荒川キャンパスと組んだ事業ということなので、地域にある資源をすごく生かした事業だという点も特徴の 1 つだと思います。

また、「コミュニティカレッジ」とほかの事業を「つなぐ」ということを生かした障

がい者青年教室や少年事業もあるというお話がありました。中泉さんは、現在社会教育主事という立場で、全体を見ながら仕事をしているということも、こういったところからも分かるのかなと思いました。

「コミカレ」は、さまざまな学習テーマで学び、出会い、地域活動につなげ、活かす、活動の成果をひろげる、というお話がありました。これは区の生涯学習計画の「学ぶ」「つなぐ」「活かす」「ひろげる」という循環を意識しているという説明がありました。事業の理念が常に意識化されているということだと受け止めました。

次に、どういった経緯でこの「コミュニティカレッジ」が立ち上がってきたのかということが話されました。2007 年というのは、「2007 年問題」と盛んに言われたときで、団塊世代の 1947 年から 49 年ぐらいに生まれた人たちが 60 歳になって、地域に帰ってくるということで、地域とか家庭に軟着陸がちゃんとできるかどうかというのが「2007 年問題」と言われたのです。でも、結果的に働き続ける人がかなり出てきて、曖昧なまま、結果的にはっきりしなくなってしまったのですが、そういったところを含めて、特に男女共同参画の場ではそういった男性向けの事業にたくさん取り組まれたという時代でした。

そのときに、荒川では地域社会の担い手としての活動を期待されたというところを踏まえて、平成 20 年から（仮称）「あらかわ地域大学構想懇談会」というものが開かれて、こういった世代の人たちに地域の中で活躍してもらおうということを考えて、議論が行われました。そこで、出てきたいろいろな課題を含めて「コミュニティカレッジ」が、平成 22 年の 10 月に開校したということでした。

当初２年間のプログラムだったのが、２年間は参加するほうも大変だということもあって、現在１年間になったという経緯なども出ています。ミッションとか、そういうところは変わっていないのだと改めて思っています。

今も「土曜日コース」と「平日昼間コース」の２コースで、平日の昼間というと働いている人は参加しにくいのかと思ってしまうのですが、働き方も多様なので、働いている方も来るということが増えているなと思いました。この間「生涯学習フェスティバル」を見学したときに会った方も、立ち食いそば屋をやっていて、日曜日に活動しているそうです。そういった勤務時間がある程度フレキシブルにできる人がいるということも、ここに関わるようになって改めて感じたところです。

周知については、転入した方に配布する転入セットや、出生届を出した方に渡すセットに「コミカレ」のチラシを入れているということで、生涯学習・社会教育の担当セクションだけではなくて、全庁的にいろいろなところと組んでやることも大切だということを改めて感じました。

さらに、ダイレクトメールというか、ＱＲコードつきのはがきを 30、40、50、60 歳になったときの方に、無作為で 1,000 件ずつ 4,000 人に送るということです。そういったことも、住民基本台帳を持っているセクションと役所の中での協働というのが行える活動かなと思って、大変驚いたところです。参加者がいない、ということをよく言われるわけですが、まだまだできることがいっぱいあるんだということを改めて感じたところです。

また、経費の話や、参加者の様子、そして、具体的にどのような工夫をしているのかということも出ておりました。

あと、学習の順番でいえば、まずは一人一人の学習から始まり、そういったいろいろな経緯で来る方、特に転居してきて、荒川区のことを何も分からないから来たという方もいらっしゃるということもありました。そういう方も含めて、好きなことが見つかるような機会となるような工夫等がしてあったり、それから、ほかの活動をしながらつながるといった、先ほどの「学ぶ」、「つなぐ」というところを意識された取組がありました。

また、学習支援として大切にしていることとして３点が挙げられました。1 点目としては、何が学習支援で大切なのか、ということです。講座運営や、事業運営に関わる職員、学習支援を担当する職員にとって非常に学ぶところが多いものなのかなと改めて思います。大きな計画に基づいた大きな部分と、目の前で学んでいる人をどう支援していくのかというところ、大きな視点と目の前の方に視点を当てた取組というのを整理しておくのがとても大事なのだろうと思いました。

２点目が、振り返りを毎回行うことです。学ぶ段取りと工夫というところでの「工夫」だと思います。

「知る」ということがとても大事になっているわけです。一緒に学ぶ、仲間のことを知る、情報共有していく、そこからいろいろな情報を得られて、人と地域を知ることになっていく。いろいろなプログラムにも、実際に活動している方の報告を聞くことがあって、地域の活動の様子が分かってくるというようなことで、深まっていく、広がっていく、つながっていくように整理するということが、事業担当者には求められているんだと思いました。

特に、20 代から 80 代まで一緒に学ぶという、本当に幅広い年代の方が学んでいるわけですが、多世代の視点から地域というのを知っていくという。こういった多様な、多世代で学んだから、それが、地域でどんな活動をしていくのかという、早瀬さんは福祉ということでテーマを持って活動しているという方なわけですが、そういった発想が出てきたのかなと思いました。

次に、３点目としては、「地域を知る」ということにつながって、地域資源を生かすという、「学ぶ」、「つなぐ」、「活かす」のうち「活かす」ということも出てきています。こういった段取りが、区の計画の「４つの視点」のとおりまとめられているのはすごいなと思います。

早瀬さんも言っているのですが、実際に活動しているところとか現場に行くことを大事にしています。商店街に行って、では、どういうふうにそれをプログラムに生かすのか、ということで、荒川の「コミカレ」の１つの特徴は、一応最初にプログラムはあるのですが、途中で変わっていく場合があるわけなんですね。そうすると、事前に打合せをしたけれども、また改めて打合せをし直すなんていうこともよくあって。この間は、「今日か明日、打合せしたいんですけれども」と連絡が急に来てしまって。そういったことにも柔軟に対応していく姿勢が、職員の方にもあるのがすごいなというところです。

学習支援ということでは、学んだことを活動につなげるということが、「コミカレ」では大事な狙いとなっています。「学びを活動につなげる学習支援」、「活かす」ということにつながっています。そういう意味では、私たちにとっても、学びを生かして活動して、それが葛飾の活動やまちづくり、地域づくりにつながっていくという、そういうところが学ぶところだと思います。「『明日をより良く生きるための学習』を仕掛ける」ということが書かれています。

それから、「情報のハブ、結節点になる」ということを職員の方は心がけていると、いうことでした。それ自体が、生涯学習センターとしても、相談とか、いろいろな事業にもつながっているということが、改めて分かりました。

そういった丁寧な取組、コロナの中でも各団体の活動を取材に行って動画にしてホームページに取り上げるということも活動支援につながるし、区民の主体的な学習や活動を支援する学習支援者の育成にもつながっていくことだということでした。

早瀬さんは以前は会社人間だったということで、最後はたしか人事を担当し働きやすい制度をつくったということをおっしゃっていました。ご自身もその経験を生かして、お母様のお世話のために月に３、４回通っていた。

そういったいろいろなキャリアや力を持った方が地域の中にはたくさんいらっしゃる。そういった方がどんなキャリアがあっても、例えばコミカレでの学びがなければ自分の力を地域の中で出す場面はなかったのではないか。そういう意味では、持っている力をまた確認して、さらにパワーアップしてエンパワーメントして、地域に生かしていく。福祉に関係ある人が「コミカレ」のプログラムに出会ったことが、それができるチャンスだった。早瀬さんとしては大変大事なプログラムだったということで、ご提供くださったのだと思いました。

早瀬さんは、きちんと福祉の勉強をしようということで、仕事を辞めてから福祉大学に入ったという方でした。「福祉大学入学の動機は社会福祉士の資格をとることでした。なぜとったかというと、資格があると信頼を得ることができるからだ。」とおっしゃっています。どんなに力があったり、思いがあったりしても、そのバックボーンがあるかどうかで聞いてくれるかどうか、話の中身よりも肩書でとらわれてしまう場合があるので、そういったことも含めて資格をとられたのかなと思います。恐らく大変だったと思いますが、そういった努力をした方なのだと思います。

それをより生かしていくための機会として、このコミカレがあり、特に早瀬さんにとってのコミカレというのはどんなものかというと、「居場所だった」ということです。早瀬さん自身は５年間参加しているわけです。そういった、ここに来ると受け入れてもらえる場ということを、「居場所」と表現されていました。

早瀬さんは、自分のテーマである「共生社会」というものを意識して調べていたらコミカレが見つかって、クリエイティブコースが目にとまった。クリエイティブな事業をつくっていこうということもあってクリエイティブコースだったと思いますが、６年前、応募の締切日に中泉さんと会って、まだ応募していいかどうかと聞いたということでした。

入ってからは、いろいろな先生たちの話を聞いて、プラス、実践で活動してきた人たちが刺激的だったと。それと、さらにすばらしい同級生、そして周りの人たちの出会いがあった。もう１つは、居場所となった。自分は何をやりたいか、というとき、１人でできないことがいっぱいあるので、一緒にできる仲間を探して、仲間と出会うことのために早瀬さんは５年間いらしたのかなと思いました。それがこの福祉のコースで出会ったんだと思いました。

早瀬さん以外にも、数年間在籍する方はいらっしゃいます。つまり、来ると仲間に入れてもらえるような、いつもいられる居場所なんだということがあるのかと思いました。「まさに実践をシャワーのように浴びた」と言っています。荒川で活動している人たちがいっぱい出てきて、いろいろな話をする。参加者の中にも、多士済々ということで、いろいろな方がいらっしゃる。そういった中で、お互いに刺激を受けたという。

それと、学習の形としては、「グループワークを通じた絆と連帯感」ということで、いわゆるアクティブラーニングと言うのでしょうか、ワークショップ形式のものがたくさんあったということです。

そういった共同活動、集団活動の連続が、企画力を高めながら、それを生かした次の市民活動につながったということを、実感しました。

その事業の内容は、「実践を常に目指した講義の内容でした。すなわち、座学として

教養を高めました、私はあのことを知っています、というような人間は期待していないんですね」とおっしゃいました。

区や自治体が税金を投入して学ぶ事業というのは、どういう趣旨なのか、何を狙っていくのか。一方では教養を高めたり、知らないことを知ることもとても大事だし、生きがいにつながる場合もある。そこを超えて、それが何か地域につながっていくようなイメージというのが、ここにはあると思いました。そういう意味では「実践」ということを学ぶ機会だったと思いました。

早瀬さんは組織で働いていた方ですから、いろいろなプロジェクトをやってきて、ＰＤＣＡとはということが、学習の中でも行われていたと言われました。

その大事な活動をサポートするのが事務局のバックアップ体制で、何かあったらまずは相談する。「相談者への回答が、否定から始まらないでイエスから始まっている」と。受け止めてから、「私はこう思う」と言ってくださっているのだなと思います。そういう意味では「伴走者」がいることもとても大事で、先ほどの中泉さんの支援の工夫ともつながってくると考えています。

そこから、テーマが共通した人たちが、早瀬さんとしては５年目の講座で仲間になった人たちとグループオレンジをつくって、「認知症サポート講座」を自ら実施しました。そういった、今まで蓄えてきた力でバンと動き始めた、というところがあります。

代表的な仲間の３人の紹介が 19 ページにありますが、「コミカレ」のダイレクトメールで来たという方も書いてありました。

最後に、「コミカレというのはインキュベーターだ」と。卵をかえすふ卵器ですね。いろいろなものを持っている人が、持っている力が、卵が割れてひなになって育っていく、そういった場になっているんだ。学びがある、疑問と好奇心の連鎖が起こっている、それが活動につながっている。

コミカレは、学びと多様性が理解できる場だとも思います。今、世の中は多様性、ダイバーシティということがテーマになっていますが、それを知らず知らずのうちに、ディスカッションの中で行われている、ということが書かれて、そういった場面づくりが大事だと思いました。

全体を簡単に整理すると、事業の位置づけが計画に基づいて明確になっている。ミッションが明確で、「学ぶ」、「つなぐ」、「活かす」、「ひろげる」という視点が全てのことで貫かれている。それから、長期の事業で仲間づくりも併せて行われている。なおかつ、地域に密着して地域活動の先輩が来て、実践をたくさん学ぶことができる。それプラス、面白い広報活動。10 歳ごとにダイレクトメールを発送したり、他のセクションと協働したり、ということも大事なことと受け止めました。

一番は、コミカレが、荒川区の社会教育、生涯学習事業のはっきり中核的な事業としての位置づけがあるということです。ここから広がっていく。例えば、私も地元の「そうか市民大学」に関わっていますが、そういった中核的な事業にはなり切れていない。杉並では、「大人塾」というのが市民主体の中核的事業になっているかと思います。一本、そういった中核的な事業があると、先に枝が広がっていくように学びと活動が広がっていくという可能性もあるので、葛飾に当てはめるとしたら何なんだろうということが、私たちにとっての次の課題になるのかなということを感じました。

あまり整理しなくて恐縮ですが、いろいろ考える機会をいただいたと思いました。

その後はディスカッションがあって、澤村委員をはじめ皆さんからも、座学だけではなく、ゼミをやったり、まちに出たりというのを、理想を掲げたけれど、なかなか実現できなかったとあります。そういうところをどのように実現できるのかということも、また学ぶところもいっぱいあったかと思いますし、長期の事業というところもご提案いただいていると思いました。

これまでの事前学習、訪問、それから来てお話いただいたところを踏まえて、感じたことや学ぶべきところ、大事にしたいことなどについて、自由に出していただければと思います。

○緒方委員　今、髙井先生のまとめを聞いて思い出したのですけれど、「あ、そうだったのか」と、改めて「はっ」と思ったのが、区の基本計画や構想が貫かれている、連動しているという点です。

と言いますのは、私は葛飾区で子どもに関連するいろいろな計画策定委員会に関わらせていただいてきて、最初が、子ども・子育て基本計画でした。もうすごく張り切って参加したのですが、ここは、保育園に皆さんが適切に入れるように、という政策がメインなんだと言われて、私が活動している子ども食堂などの子どもの貧困問題や不登校の問題、そういうのはこの計画にはあまり関係ない、というようなことを言われました。経済的に困窮してしまう若者を支援するという国の法律に基づいた自治体の計画は葛飾区にもあって、何年後かに、子ども・若者計画と子ども・子育て基本計画を合体させるので、それまで待ってください、と言われてしまったのです。

教育振興基本計画策定検討委員会にも、張り切って参加したんですけれども、子どもの貧困や不登校などは、本当にサブのサブのような扱いで、ここに一言触れてあるからもうそれで十分、みたいな感じでした。教育というと学校教育で、学力を向上させるというのがメインのテーマで、幸せな子ども時代を送るとか、生涯学びを続けていくとか、そういった認識が全くないような話し合いだったなと思いまして、そこが葛飾区は残念だなと思いました。

○澤村委員　生涯教育が目指すところというのは、荒川区においても、葛飾区においても多分そう大きな違いはないと思いますので、今回、荒川区へお伺いしたり、お話を聞いたりして、制度的に葛飾と荒川は何が違うのか、運用の仕方がどう違うのか、葛飾区として学ぶべきところはどこなのか、という視点で、当然私も見てきたんですけれども、やはり違うところがたくさんありましたね。

一番大きな違いは、荒川区は「コミカレ」という１年間通してテーマを設けて、普通の大学と同じような形式でやるというところ。葛飾区は区民大学で単発講座を繰り返しやっているので、まず一番違いを感じたところです。では、そのコミカレ方式でやると、どういうメリットが出てくるのかと考えたときに、「荒川コミカレ」というイメージがまず定着しますよね。こういうカレッジがあるんだと。それからキャンパスがあれば、よりそのイメージは高まっていくだろうと思います。

そこから、同窓会の組織ができるというところがまたすばらしいところで、単発の講座では、なかなかそういうことができないと思うんです。

先ほどの、「学ぶ」、「つなぐ」、「活かす」、「ひろげる」の中で、単発講座だとどうしても「学ぶ」ということが中心になってくるのが、長期講座では、「つなぐ」、「活かす」、「ひろげる」というところまで広がっていく。そして、「循環型社会」ということが１つのテーマでしたけれども、その「循環型」というのは自分で学んで、それを生かして、また新たなことを学んで、またそれを生かすという、自分の中での「循環」としか考えていなかったんですけれども、今言った「ひろげる」というところまでいけば、「こういういいところがあるんだよ」ということを他の人に知らせることができて、「じゃあ、私も行ってみようかしら」というような横のつながり、「循環」というものが生まれてくる、という気がしました。

反面、どうやったら人を集められるのか、というところが一番教えていただきたいところなのです。いろいろなＰＲ方法を、先日おっしゃっていたと思うのですが。反面、そこまでして人を集めなくてはいけないものなのか、とも感じました。義務教育ではありませんし、お金の問題もあるでしょう。

それと、我々のテーマの中の「誰もが生涯にわたって学び続ける」ということなのですが、その「誰もが」というところが、果たしてできるんだろうかという疑問があります。１年間、やはり時間的、経済的余裕がなければ、ちょっと難しいような気もします。働きながらカレッジに通っているという人もいっぱいいるとおっしゃっていましたけれども、生活がだんだん苦しくなってくるような社会状況の中で、「誰もが」ということが実現できるんだろうか、という心配もありますね。

私は４年間区民大学運営委員をやって、講座を企画する立場にいました。結局、その

講座を受けている人ではなくて、企画する人たち、第４・５期のメンバーが 10 人ぐらいいましたが、それが１つのコミカレだったんですね。そこで、そのグループで、どうしたらいい企画になるんだろうかとみんなで議論を繰り返したことが、今の荒川区の「コミカレ」なんですよ。やはり一緒にやった仲間というのは、今でも単発講座にはない付き合いがあります。

だから、果たして葛飾区でコミカレのようなスタイルの区民大学をやったほうがいいのか、あるいは、今のように、大学とは言わなくても運営委員会みたいなスタイルで意見を交わすような場がその代わりになるのかも知れない。そんなようなことを感じました。

○議長　ＰＲについては、かつては職員があちこち出ていってＰＲしたということが書かれていたんですが、今は、それは修了生とか卒業生の人たちが自らやっているようです。いわゆる口コミがかなり大きい。ＰＲすること自体も大事な活動と認識されているのだと思うんですね。

そのようにして、「コミカ」レが目指している「幸福実感都市」、幸福な荒川区にしていくということにつながっていく。そういうことを参加者自身もきちんと認識しているように感じました。

○澤村委員　基本的には講座の魅力というのはあるのでしょうね。

○議長　それ自体も大きいのでしょうね。

○澤村委員　だから、勧められるし、ＰＲもするわけですよね。自分で苦い思いをしたらほかの人は誘わないですよね。だから、１年なりやって、これは面白かった、充実していたということがあるからこそ、自然と説得力をもって他人に勧める流れができているのかもしれませんね。

○議長　そうですよね。私たちも、おいしいものを食べて、食べておいしかったからおいしいと言えるんですよね。食べてもないのに「おいしいです」と言えないので、そういったやはり同じ「受けたらどう？」という言葉でも、職員が言うのと、やはり学んだ本人が言うのでは違う。

今、改めて澤村委員のお話を聞いて、澤村委員たちが区民大学の企画をし、どんな講座をやるか考えたりしたわけですよね。まさに、講座をつくっているわけなんですけれども、荒川のコミカレの参加者は、職員がつくったプログラムに沿って学んでいる。学びながら、より主体的に学びに参加していくような仕組みがあって、そういう仕組みだからこそ、20 回とかプログラムが必要なわけなんですね。

この講座自体は、区民の企画運営委員が企画して運営しているわけではなくて、葛飾の区民大学は区民の人が企画をしている。「参画」ということでは、葛飾区は進んでい

るかも分かりませんが、「コミカレ」では、学びながら学びの主体者になっていくという。そうなっていくようにサポートしていく職員がいる。かなり違った構成になっているので、どっちがいいかどうかという話ではないかとは思うんです。それぞれ大事なところを持っていて、それぞれ生かしていくところがある。

「コミカレ」の将来像としては、コミカレ運営委員会みたいなものがあって、学んだ本人たちが学習をつくっていくとか、講座をつくって運営していくとか、学習支援をしていく。今は職員が学習支援員になっているわけですが。

今日、少し学ぶ「すぎなみ大人塾」は、プログラムの中に「学習支援者」と「学習支援補助者」がいるんですね。主体的に活動できるために支援をする人の存在というのがある。だから、いろいろな形があるんだと改めて思いました。どれがいいのかは、またこの中で議論していく中で、葛飾区で選んでいけばいいのではないかなと思っています。

○佐藤委員　前回、荒川区の方が見えたとき欠席だったので、このお話を聞けなかったのですが、その前に、現場に行ったときに感じたのは、人が集まるところへの敷居の低さです。構えたところで、うんと構えてそこに参加するのではなく、敷居の低さが、人が集まるきっかけになっていくのではないのかなと。

いい講座、内容にしていくというのは、やはり１回ではできないことなので、ボランティア活動でもそうなのですけれど、何度も繰り返し同じことをやって、そして、振り返りがあって、少しずつステップアップしていく。「ステップ・バイ・ステップ」という名前をつけた地区委員会活動の行事もあるんですが、そこでも様々なことを繰り返しながら 20 年近く行っている事業があります。野外コンサートなんですけれども。だんだんそこに賛同する仲間も増えてきて、いろいろな意見も言い、ただし、そこに携わる人の中に基本的な信念がしっかりした方がいないと、めちゃくちゃなことになってしまいます。やはり荒川の皆さん、しっかりした方がいて、どんどんステップアップして続いているんだなと、感じました。

生涯学習課で行っている「かつしか郷土かるた」の全区大会が、今度の日曜日にありますが、かるたもつくっただけで終わらずに、それを全区大会まで広げていって、それが続いているという、これはすばらしいことだと思うんです。当初、出来上がったときに、このかるたに関して、学校の先生もちょっと懐疑的というか、参加に後ろ向きな声も何人かから聞いたことがありました。それが今では、そこに参加して、子どもたちを何とか勝たせてあげようと、そういうような気持ちで取り組んでいる方がほとんどではないかと思うのです。ですから、葛飾区も捨てたものではないなと。生涯学習課の頑張りもすごいなと思っています。ざっくりとした感想ですけれども。

○議長　ありがとうございます。その「かつしか郷土かるた」というのは、運営につい

ては、青少年委員や地区委員会などの区民の方も運営をしているんですか。

○佐藤委員　そうですね。地域のほうで予選会を受け持って、そこで代表を選出しています。代表の選び方はその地域によって違い、予選会をやっているところもあれば、指名で学校で決められた人数を代表として出している地域もあります。それで 19 の地区で出した代表２組ずつで、全区大会をやっています。

○事務局　葛飾の郷土かるたは、上毛かるたを先輩として、「上毛かるたを目指せ」ということでスタートしました。上毛かるたの場合は、子ども会が中心になって、各地区の子ども会が選手を選出し、全体の会、県大会があるという形です。葛飾区の場合は、子ども会も盛んではありましたけれども、ある地域、ない地域がございますし、学校を単位にすると、主体的に取り組む、取り組まないは学校の判断になってしまうので、青少年育成地区委員会が全区的に 19 地区にあるので、青少年育成地区委員会単位で選手を選出するというスタイルを目指そうという、目標と狙いと戦略がはっきりしたシステマティックな事業です。

全体的な運営は生涯学習課がやっているんですけれども、全区競技大会の前身となる地区競技大会については青少年育成地区委員会に担ってもらって、そこが学校と協力をしながら選手を選出するという仕組みを、それぞれの地域ごとにつくっていただいています。

○佐藤委員　葛飾区にゆかりのあるものを題材にとっていますから、地域によっては、自分たちの地域の中のものが取り上げられていない、と怒っているところもあって、当初は「そんなもん出ていられるか」とひがんだ地域もありました。今はもう全地域で出ています。

○事務局　最初は手が挙がらなかったですから、19 地区中５からスタートしています。直接地域の名前がうたわれている新宿というような地域は、読み札の中に「新宿のまち」と、自分の地域の名前がどんと入っているわけです。そういうところは、もう誇り高いわけです。そういったものがないところも現実にはあるので、温度差はありますが、子どもたちが一生懸命頑張る姿を地域の大人が応援するということを目指して、子どもたちが大人になったときに、その地域の子どもたちをまた育てていくという「連鎖」を進めていこうということで、やっています。

○議長　最近のテレビで、上毛かるたのことを群馬出身タレントの井森美幸さんが言っていましたけれども、みんな知っているんですね。

○事務局　空で言えるわけですよね、群馬県人は。誇り高いわけですよ。

○議長　この「かつしか郷土かるた」も、そういうものになってくると非常に可能性はあるんでしょうね。

そういった地域のいろいろな実践は、子どもにとってプラスになっていくし、そういったことに取り組んでいる大人たちがいるんだということを子どもにも知ってもらいたいですね。「コミカレ」で言えば、「コミカレ」の中にしっかり地域活動をしている人たちがいっぱい出てきて話をしてくれたりとかすれば、自分のこれからの活動のイメージもどんどん湧いてくるし、そういうようなことで実践につながっていく、卒業後の活動につながっていくということがイメージしやすいというのも、大事な特色だなと思って受け止めたところです。

○副議長　私は、当日は参加できなかったのですが、前回参加させていただいて感じたのは、継続的にずっと関わってくれている職員体制、バックアップ体制というのが、結構“肝”の部分かな、というふうに思いました。

最初はよちよち歩きで、まずは職員が地域に出て行って、各地域団体活動を知って、そこを今度はつなげていくというところから始めていって、試行錯誤しながら１年間の「コミカレ」をやっていくわけですけれども、そこからだんだん育っていって、サークル活動が出来上がっていく。様々多様な活動ができていくと、地域の中のつながりや動きが、今度はより一層スムーズになってきて、職員のやるべきことというのは、地域に自分たちが出ていくよりも、相談を受けたらそれを「ノー」と言わずに、できるだけ「イエス」でできることを考えたり、あるいは、コミカレで知り合った地域の方々を紹介したりつないだりという、そういうどちらかというと、相談プラス、コーディネーター、ネットワーカーというほうに軸足を置いていく。そういう人材が常にいる、というのが大きいのだろうと思いました。

実は先日、日本青年館というところで、全国地域青年活動「実践大賞」というのがあったんですね。全国から自主的、自発的な地域青年の活動が応募されてくるのですが、実は、50 年以上の歴史の中で非常に珍しく、東京都荒川区から応募があったんです。それは「あらかわぽっせ」という学生が立ち上げたＮＰＯなのですが、子ども食堂とかをやって、半年でそれを立ち上げたという。いろいろと調べてみたら、それをバックアップしているのは生涯学習センターだったのです。常に生涯学習センターに相談して、バックアップして、決して「指導」というわけではなくて、手は出さないで、あくまでやるのは学生自身、若者自身なので、それ以上あまり立ち入らないようにしながらも、生涯学習センターで相談を受けてやっているらしい。推測ですけれども、「コミカレ」でいろいろなネットワークがあそこに行けばあるし、実際に場所も借りられている。コミュニティカフェみたいな場所です。多分、そこを紹介してもらって、間借りさせてもらったり。あと、助成金をとったりしているんですね。だから、若い人たちが、そうやって自分たちでやりたいと思ったときに、立ち上がってくるだけの土壌ができてきて

いるんだな、というのを実感しました。

そこには影となり日向となり、縁の下の力持ちで、常に職員さんがサポートしているという面に着目しました。これを、どういう形で葛飾区に生かすかは、僕は葛飾区の動きというのがまだ分かっていないところがたくさんあるので何とも言えないのですが。

○澤村委員　荒川区は生涯学習課というのは、地域文化スポーツ部というところにあるんですかね。区長部局のほうに行ってしまっているのかもしれないですね。でも、この間の中泉さんの資料を見ると、それ以外にまた「教育委員会事務局教育総務課」という。兼務になっているんですかね。

○事務局　社会教育主事は教育委員会所属ですが、兼務になっているかもしれません。

○澤村委員　社会教育主事さんも兼務になっているようですね。

それから、荒川区で「シルバー大学」というのもやっているのですが、これは福祉部の高齢者課というところが担当でした。書道やコーラス、体操、水彩画など、葛飾区で言えば、どっちかというとサークル活動的な感じで、援助はあるのかもしれませんけれども、荒川区のように区でやっていいのか、とも思ったのです。しかし、結構うまくかみ合っているんですよね。主管課が福祉だったり、地域だったり、教育委員会だったり、いろいろなところで生涯学習をやっているけれど、ちぐはぐという感じは受けなかったので、うまく絡み合って、効果を上げているのだろうなという気はしました。

人口も一般会計も葛飾区の半分ですよね、荒川区は。

○議長　そうですね、小さいですね。約 22 万人ですね。

○澤村委員　二十何万人で 1,000 億ちょっとぐらい。そういう状況の中で、人が集まっている。そこがやはり、なぜかな、と思っていたところですね。

○議長　地域文化スポーツ部は、区長部局ですね。教育委員会には生涯学習課もなくて、教育総務課という中には、中泉さんの席はあるのではないかと思います。

○澤村委員　福祉部は福祉部でやっているわけですね。

○議長　やっていますね。「シルバー大学」は福祉部で。

○澤村委員　「生涯学習フェスティバル」では、学校アートのところの中に、お互いに入り込んでうまくやっているように見えました。

○議長　別組織ですごいですね。都内は 23 区中 11 か 12 ぐらいが、生涯学習部局が区長の部局に移管されています。かつての教育委員会は学校教育関係と社会教育関係の２つの部局で構成されていましたが、今は、教育委員会イコール「学校教育委員会」になりつつあるという状況になってきています。

○澤村委員　どっちにあってもいいと思うのですが、やはり葛飾区にも高齢者関係の講座は福祉でやっていたりするではないですか。その辺がうまく連携がとれているのかど

うかちょっと分からないのですけれど、連携をとってやるべきだとは思います。

○議長　区民大学という大きな枠の中に、福祉部がやる事業も位置づけられているのですね。

○事務局　はい。「かつしか区民大学」は全庁的な学びの仕組みなので、その中に高齢者の学びを支援する「シルバーカレッジ」も入っていたり、それから、健康づくりに関する「健康大学」というのも入っていたり、区民の学びの仕組みとして一番大きな枠としては区民大学という枠があって、それぞれのセクションが行っている対象別のいろいろな事業については、区民大学の中に入っているという位置づけです。

○澤村委員　「シルバーカレッジ」は年齢制限も設けているではないですか。60 歳以上でしたか。

○事務局　55 歳以上ですね。

○澤村委員　だから、そういうところがどうなのかなという話があります。

○議長　その大きな「かつしか区民大学」という枠の中で、澤村委員さんたちはいくつかの区民向けの講座をつくる役割だったわけですね。

○事務局　そうですね。区民運営委員会ということで。

○澤村委員　それは別に高齢者向けだとか、若者向けだとか考えていたわけではありません。若い人たちをどう取り込むか、というのが常に課題ではありました。結局、その解決策が見つからなかったということです。

○議長　それぞれ区によって施策や歴史の違いが当然ありますので、生かせるところは生かしていければいいのかなと思います。「かつしか区民大学」は、いろいろなセクションがばらばらにやっていたものをつなげていこうということで取り組んできたわけですね。そういうことで、全部のところの事業や講座が見えるわけですよね。そういった「見える化」していくことに大きな意味もあったでしょうし、単位制もとっているんでしたか。

○事務局　はい。「学習単位認定制度」というのを持っています。

○議長　たくさん単位をとれば何か表彰があったりすることで、たくさん学ぼうとする人が出てくるわけですね。いろんな取組のやり方があるということです。

その区民大学のようなものがどこをどう目指して進んでいくのかというところを、澤村委員さんの考えではもう１回考え直してもいいというところもある、というふうに受け止めているんですね。

その辺、荒川区の「コミュニティカレッジ」は明確で、「つながる」、「活かす」ということで、学んだことを活かして地域の活動を展開していくということにある。自ら学ぶ、それでいろいろなことを学んでよかった、それも大事だけれども、それを活かし

ていくというところまで考えて事業展開をするのか、というところの違いが出てきているのかなというところがありますね。

○副議長　１つ確認したいのですが、荒川区は、生涯学習計画、推進計画があるようですけれども、葛飾区の場合は、もともとあったのですか、それとも途中で教育振興計画のほうに吸収されたのですか。

○事務局　過去には「葛飾区生涯学習推進計画」というのがあって、その中で「かつしか区民大学」や「わがまち楽習会」という主要な生涯学習課の施策が展開されていたんですけれども、「教育振興基本計画」に吸収されて、学校教育と生涯学習の両方の計画を含む形に変わりました。

○副議長　大体ほかの区を見ていても、やはり吸収されてしまうと、結局生涯学習のほうが縮小する傾向があるようです。ボリュームとしては、学校教育中心の計画になってしまって、もうこんなに端っこに生涯学習ということになってしまう。

○事務局　分量としては４分の１になっています。４つの基本方針の中の最後の１つで、ほぼ学校教育中心の計画で、最後ところで生涯学習も、といった形です。

○副議長　生涯学習計画はやはり本当は単体で議論されて、そこでしっかりとした、視点というのが位置づいてくると、区民大学の事業もより明確になってくるような、そんなことも感じます。

○事務局　葛飾区の基本計画の中に、「計画事業」と呼ばれている、実際に重点的に実行していく事業があります。今の基本計画の前の 10 年の計画の中には、「かつしか区民大学事業の推進」が計画事業として載っていました。生涯学習推進計画は無くなったけれど、区の基本計画の中では、きちんと「かつしか区民大学」を位置づけていたのです。しかし、区民大学も 14 年目を迎えているので、生涯学習課として区民大学だけではなくて、従来から行っている団体支援や、新たな活動を掘り起こしていくような事業に展開する必要があるというところもあって、新しい基本計画の中では「学びの機会の充実」という事業計画に切り替わっています。それが３年目になります。

澤村委員がおっしゃったように、「かつしか区民大学」も、どういうことを目指してやっていく仕組みなのかというのをもう一度改めて議論する必要がある、というのは事実だと思います。

○副議長　荒川区の「コミカレ」は、そういう意味では地域活動の支援とコミュニティカレッジとが、うまくリンクしている感じがしますね。

○事務局　そう思います。「まちづくり」や「人づくり」というところが、ちゃんとミッションに入った学びの仕組みだと思います。「かつしか区民大学」も、そこの部分は理念として一部分持っているのですが、全体的なものに広がっていないので、立ち上

がって十年以上になりますが、区民や行政職員の認知度はそこまで広がっていないという現実があります。

○議長　荒川区のこと、杉並区のことを学んで、その後はその２つを踏まえながら、葛飾区の現状はこうで、では、どのようにしていけばよいかというのは、今後議論することになると思います。

きっといろいろな取組が各地であるかと思いますが、葛飾区でやってきたことをきちんと確認をした上で、では、どこをどうすればより良くなるのかというように。教育振興基本計画に社会教育・生涯学習部門も入っているけれども、それはそれとした上で、場合によっては生涯学習課なりの基本的な考え方とか、基本方針とか、「計画」ではないけれども何か分かりやすいものを作って、それに基づいて生涯学習関連事業を進めていくということが必要ならば、それを作っていくこともあり得るのか。この会議でどこまでできるか分かりませんが。こういったことが大事ではないか、というところで終わってしまうかも分かりませんけれども、できるだけ次につながっていくようなものができれば、と思います。

○事務局　ただ、ロードマップはつくっておく必要があるかと思います。

○議長　そうですね。そういうことを考えておかなくてはいけないなと思っています。

どこまで荒川区の取組から学び取ることができたか、もらった資料も含めて戻ったりしながら、活かせるところを考えていき、議論の中でも反映させていければと思っています。

今日は、先ほど副議長からもスタッフの存在のことも出てきました。やはり学びの中では、そういった支援者や職員の存在というのは大事だと改めて確認できたこともとても大事だと思います。荒川の中泉さんは、最初は違いますが、もともと数年間「コミカレ」専業でやっていましたが、今は社会教育主事となって、「コミカレ」は若手の社会教育指導員が担当し、そういった職員への支援者として中泉さんがいた上で、他の事業も担当しておいでです。葛飾区も社会教育主事という専門的に支援する立場の方がいらっしゃるわけですから、社会教育職員に求められる役割とか、そういったこともまた改めて考えながら、議論を進めていければいいなと思います。

１つ目の議題、振り返りは、以上で終わりたいと思います。

ここで、５分ぐらい休憩したいと思います。

（休　憩）

（２）「すぎなみ大人塾」の事前学習

○議長　では、再開します。

「すぎなみ大人塾」の事前学習ですが、はじめに、イメージを持っていただくために、５分ぐらいのビデオを観ましょう。

（映像の視聴）

○議長　ちょっと声が聞こえなかったので、ぜひご自身で、家で見ていただければと思います。ＹｏｕＴｕｂｅで、「すぎなみ大人塾」で出てくるのかなと思います。

最後、檜枝さんという方が出ていましたが、あの方は立教大学の名誉教授なんです。そういった地域の方にいろいろな人がいるわけですね。そういう人の力をぜひ発揮できればとか、出会える場が欲しいなと思ったところです。

では今、皆さんのお手元にある資料を見ていただいて、これですね。これの中に原稿を入れてあります。次回来てくださる社会教育主事の中曽根さんが書いた「自己発見の学びを促す　すぎなみ大人塾」ということで、これはこの『社会教育経営のフロンティア』という本の中に載っている事例です。

では、読んでいきましょう。では、緒方さんが１番、２番、（２）のところは澤村さんというような感じで、順番でいければと思います。では、お願いします。

（『社会教育経営のフロンティア』の音読）

○議長　ありがとうございました。今、ざっと読んだだけでも、荒川区とのつながりも、いろいろなところで随所に感じられたと思います。

初めの「事例９」と書いてあるところにプログラムが載っていますが、「総合コース」と「高円寺」、「西荻」となっています。上の２つは 16 回とか 11 回と、非常に長いプログラムができていますね。西荻は６回とちょっと短めかも分かりませんが、夜か土曜日の午後という、いろいろな方が参加できる時間に設定されていました。

荒川との関係で言えば、２ページ目の（２）番、学習支援に関わる「学習支援補助者」や「学習支援者」等の補助者がいること、役割が違っていて、地域の中での活動を紹介してくれる立場の助言者、補助者がいる、というようなことも非常に面白いところだと思いました。

「学習支援補助者」のところの文章の最後、「2017 年度から立ち上げた地域２コースでは、この学習支援補助者の役割を卒塾生というような方にお願いしている」という、これも１つの「循環」、学んだことを活かして、学ぶ立場の方が今度は補助者になるという、ここにもまた循環があるのかなと思ったりしました。

次に、卒塾生の支え合いというのも、「大人塾連」というのができていて、次回来て

いただく朝枝さんという方は、「大人塾連」の代表ですよね。

○事務局　そうですね。

○議長　「連」ということで何をやっているか、というお話を聞けるかと思いますが、そういったところがまつりを開催したりとか、講座をやったりしている。合同成果発表会的なものである「大人塾まつり」は、卒塾生の様々な活動グループが店を出し合い、活動を見せ合うということでは、荒川の「生涯学習フェスティバル」ともつながるところがあります。

「成果と課題」というところにも書かれていますが、ここはまた１つ、耕作放棄地の問題などもあります。特有の課題を踏まえての取組かなと思ったりしたところでもあります。

最後の「他の組織」ということでは、「アドバイザー会議」というのがあって、社会教育委員と社会福祉協議会委員ということで、社会教育と地域福祉の担い手がいらっしゃるということも、また１つ面白いところかと思います。今、「ウエルビーイング」とかという言葉はとても大事になっていますが、教育と福祉というのは１つのコインの裏表ではないかという議論があります。どっちが裏でも表でもないわけで、両方あってコインが成り立っているかと思います。荒川のコミカレでは、早瀬さんたちのグループは福祉の活動をするということになって、社会教育の学習から、グループ学習活動を通して、また、地域の「ウエルビーイング」を支えて向上させていくというようなことが、何かつながるところかなというようなことを思いました。

最後は、荒川でも確認した基本的な教育計画に基づき、どこに位置づけられているかが明確になっていることの大切さを、改めて感じたところでもあります。

資料の中に、もう１枚配っているものは、2020 年に開かれた「全国ボランティア交流研究集会」が今年も３月に開かれるんですが、そこに「大人塾」の修了生で参加していた方と、その事業を担当した元の社会教育指導員、この方は今は違った立場で施設運営をしています。このときは、板橋の環境施設の副館長をやっていて、今は鎌倉駅前の市の生涯学習センターの館長か副所長をされています。私は長いお付き合いがある方です。その事業を担当していた職員と、事業を学び終了した方の２人に来ていただいて、「主体性を尊重したコーディネーションとは何か」ということを考える企画があったので、そのときの大ざっぱなまとめの資料です。

１つのものを両方の視点から見ると、やはり面白いことが見えてくるのではないかと思います。下のほうには、報告していただいたことを書いています。「大人塾」は何でもありというところがまた面白くて、真面目にやらなくてはいけないということはないんです。やりたいことがやれるという、「大人の放課後」なので。発表された大森さん

は、会社員の方で、営業をやっていて、非常に面白い方で、「アソビノベーション」という、遊びとイノベーションでそういうものをつくって、オリンピックのような競技大会をやったりしたんですね。ちゃんと入場行進をやったりとかして。そういった面白いことを真面目にやってしまうようなところ、それをまた職員が応援しながら、しっかり何かを見つけていくようなことをやっている、という話を聞かせていただきました。

そういった「楽しさ」を土台に動いていくというようなことも、学びの大切なことなのかなというようなことが参加した方に伝わっていったところが、記憶としてもあります。

「参加者の声」というところで、「楽しいとか好きという気持ちで仕事ができている？」ということを問われたんですね。こういうところは忘れてはいけないのではないか、というところを、「楽しい活動」から受け止めていただいたのかなと思っています。

以前から「ボランティア」という言い方が気になっていた。私はあまり「ボランティア」と言わず「ボランタリーな活動」と言い換えて使っているんですが、そういうことを考えて、受け止めてくださった方もいらっしゃったな、というところであります。

こういったいろいろなところで杉並の取組も取り上げられていますので、ぜひまた次回、いろいろなことを発見していければと思っています。

あと、区の広報誌「広報すぎなみ」の去年の８月号に取り上げられました。見ると、若そうな人もいますが、大体中高年の方が多くて元気にしている、こういった学びでまちをつくる「大人塾」というのが出ています。楽しそうな顔ができるというのはとてもいいことなんだ、と思ったりします。ずっとむっとした顔で学ぶこともありますが、楽しく学ぶことも大事だなと思ったりしているところです。

どうでしょうか、こういうところは触れていただきたいとか、今の段階で何か疑問とかあればお伝えして、次回お話しいただくことも可能かと思います。何か聞いてみたいところとか、ありますでしょうかね。

職員の方と活動している当事者の方がいらっしゃるわけですので、それぞれ関係性とか、今回の荒川の中泉さんが支援ということで細かいところを話していただきましたので、例えば中曽根さんには、私も、どういう「支援」を大切にされているのかや、そういったことを考えた経緯みたいなところも、お話しいただきたいなと思います。活動する立場の朝枝さんからは、その支援をどう受け止めて、自らやりたいことにそれがどう生きてきたのか、というところも当事者の方からお話を聞きたいなと思ったりしていますが、皆さんから、こんなことを確認したいな、尋ねたいなということがあれば。

いかがでしょうか。

朝枝さんもかなり長くやっている方で、最初の関わり方とは立場が変わって、社会教

育委員もやられた方なんですね

今、一緒に「社会教育の再設計」という取組をやっており、その実行委員長をされています。杉並区には、また面白い一般財団法人があって、各地の社会教育やまちづくりの団体に助成金を出しています。その助成を受けて「社会教育の再設計」という事業も今までに４回やってきて、１回につき 100 万円ぐらいの助成を受けています。職員の中曽根さんはその財団の理事をやっていたかと記憶しています。なので、その法人の理事長さんも、学習会に時々参加してくれたりしています。そういう、とても大事な人がいるんだなと思いますね。活動にはどうしても財源が大事になってくると私は思うので、どういう財源でやっているかということも、市民団体ではとても大事だと思ってお聞きしたいなと思っています。

では、あとはもう当日聞きながらどんどん質問をまた出していただければと思います。特に荒川区のことを学んだこと、気がついたことなどを踏まえながら、ぜひ質問を出していただければ。

○事務局　こういうことを聞いてみたいとかということがもし浮かんだ際は、メールでいただければ、先方にはお伝えします。

○澤村委員　座学中心じゃないということなのでしょうね。

○議長　いろいろですが、とにかく「参加型学習」でやりますね。ワークをやったり。

○澤村委員　まちを歩いていろいろなことを調べて、自分たちでテーマも持っていって、まとめていくというような感じですかね。

○議長　そういう感じがしますね。

○澤村委員　指導者がそこについていく。

○議長　応援しているわけですね。

さっきの動画に登場していた女性は、エンパブリックという団体の人なんです。代表者も含めて地域・市民活動を支援している、面白い活動をやっているところの人が、また地域で、通常の社会教育云々という立場でない、ちょっと違った立場で活動していらっしゃる方なんです。

○副議長　資料を読んだ限りでは、どのようにプログラムをつくっているのかという点が気になりました。誰がどのようなアイデアを出して、そのときのプログラムをつくっていくのかということと、あと、荒川区さんと共通しているのは、杉並区さんでも「知る」、「つながる」、「伝える」というのが出ていました。仲間をつくるということも、大事な観点として入れている。個人の座学ではなくて、また、学習という面だけではなくて、つながりが生まれるというところを大事にしていて、その先のビジョンとしては、そうした人たちが自主サークルをつくったり、サークルまでいかなくても、個と個のつ

ながりであっても、地域でお互いに顔の見えるつながりがたくさんできることによって、地域全体が風通しよく過ごしやすいというか、それこそ「ウエルビーイング」を高めていくような地域コミュニティのビジョンを持っているのかな、と感じました。その先にある、「どういう地域社会をつくっていくか」というところまでビジョンを見据えて取り組んでいるという点では共通しているなと思いました。

親計画としては、荒川区は生涯学習推進計画があるのですが、あと、基本計画もそうなんですけれども、杉並ではどうなのか。ちらっと「社会教育計画」という言葉が出てきたんですけれども、今もそれは持続しているのか。もしかしたら、その後になって吸収されたというような流れがありそうな感じもするんですけれども。今そういった理念的な部分というのはどうやって支えているのか、というのは、ちょっと気になりました。

○議長　この本が 2019 年のものなので、最後のところは平成 31 年度で終わってしまっている計画ということになっています。今どうなっているか、確認が必要ですね。

この資料を見てみると、いろいろなことが書いてあるので、気がついたらぜひメールとかで連絡してください。大もとのプログラムは誰が最初につくったのか。今、補助者の方も含めてプログラムづくりをしているのかどうかとか、そういう基本的なところもありますよね。

○副議長　「何でもあり」と言いながらも、でも、「何でもあり」ということは、逆に言うとそれを集約するのは大変で、どこでまとめてテーマとして決定させているのか、ちょっと気になりました。

○議長　プログラムが終わって、終わってから活動ということで、「何でもあり」になってしまうんでしょうか。「大人の放課後」、「部活をやるよ」なんて書いてありますから、これはそれこそ何を部活でやるのか。そこに至る講座自体のことはいろいろな思いがあってつくられたプログラムなのでしょうね。

○副議長　そういう意味ではコミカレのほうと同じように「インキュベーター」という装置としてやっているのですかね。

○議長　両方とも、活動が生まれているというところは、すごくつながっているところですね。

ありがとうございます。では、次回までに読んでいただいて、その上でご参加するようにしていただければと思います。

また、次回もぜひ楽しみにしたいと思います。

（３）今後の会議の進行について

○議長　では、今後の進行ということで説明をしてください。

○事務局　次回は３月 21 日で、今、お話がありました杉並区からお２人に来ていただいて、「すぎなみ大人塾」についての学習会を、ウィメンズパルで２時から行います。

その前に来週、正副議長においでいただいて、正副議長会を開き、これからの中身について原案をつくっていただこうと思っています。

資料３のスケジュール表をご覧いただきたいのですけれども、日程は、３月 21 日の後は、４月 23 日と６月 11 日と、正副議長のほうで計画されていますので、よろしいでしょうか。この日程は入れていただければと思います。６月は補助金の審議をしていただきます。その後はまだ白紙ですので、正副議長の会議で検討していただきたいと思っております。

○議長　ありがとうございました。次回は３月 21 日、杉並の方に来ていただきます。

以下、４月 23 日、６月 11 日まではスケジュールに入っておりますので、確認をしておいていただければと思います。また、それ以降含めて、最後までの展望みたいなところを検討の上、また次回お時間をいただいて提案を、こんなふうに考えているんだということをお出しできればなと思っています。

（４）その他

その他、何か情報提供などは、よろしいですか。

では、ちょうど予定の時間になりましたので、会議を終了します。ありがとうございました。

―閉会―